

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Happy Seeder reaps sowing reward
オーストラリア

不耕起播種機ハッピーシーダーの成果



新興国の小規模農家のために新しい不耕起播種機が開発された。オーストラリアの発明者によると、費用対効果が高く、稲株を含む大量のわら屑の間を通過して播種することができるという。地表面に重たい稲株が残っているために、後作の小麦をドリルで直播することが難しかった地域に不耕起栽培を広めようと、国際農業研究豪州センターのプロジェクトの一環として、この播種機が考案された。

現在そのような地域では、耕起、播種するために大半の稲株を燃やして処分している。例えば、インドのパンジャブ地方では、毎年収穫後3週間にわたって1900万トンの稲株が焼却されているため、これに代わる採算の合う手法として強い関心が寄せられている。

ハッピーシーダーの開発者は、豪州ニューサウスウェールズ州ワガワガのチャールズ・スチュワート大学教授ジョン・ブラックウェル氏だ。同氏は手頃な価格で効率の良い不耕起栽培向け作業機の開発を目指していた。2002年に完成した最初の試作機は、わらマルチ飼料収穫機と播種機を複合したけん引式作業機だった。後にこれらを合わせて一体構造にした。

最新機種は不耕起播種機にタイヤからわらを取り除く逆回転のフレイルがついている。わらは刃と刃の間をすり抜け、播種後の列をわら屑で薄く覆うことができ、効果的な作業を行なうための唯一の条件は、わらが機械の前に均一に広がっていることだ。

この播種機を用いた結果、コメの収穫に続いて小麦の播種を行なうまでの間に、土壌から水分が大幅に失われることがなくなった。



オーストラリアで開発されたハッピーシーダー。現在、インドの7農家、パキスタンの1農家のために準備が進められている。トラクタ所要馬力は38馬力。

Workmax makes an African impact
南アフリカ

ワークマックス、南アフリカに進出



JCBファストラック・トラクタの南アフリカ国内で販売開始した（本誌前号参照）グリーンフィールズ・アグリカルチュラル社は、不整地でも走行可能なワークマックスに関しても多数の問い合わせを受けているようだ。

同社CEOのジェームス・スマート氏はもちろん、この四駆車を強く推しており、「ワークマックスは、四輪車やUTV（多用途車両）の購入を検討している農家にとってついで。多用途性とオフロード性能を兼ね備えた当製品は、ピックアップトラックから小型トラクタやトレーラーでも代用する」と話す。

同氏は続けて、「多用途車両は価格的にも従来の四輪車とさほど変わらない。ディーゼル燃料消費も、負荷がない場合、リッターあたりの走行距離は20kmとの調査結果がある」と話す。784cc/24馬力のヤンマー社製エンジンを備えたワークマックスは、農場や牧場、建設現場におけるあらゆる作業に対応できるという。その他にも、同社の顧客から反響が大きい特徴として、独立サスペンション、非線形特性ばね、250mmの下部クリアランス、電機制御4WDとデフロックがある。荷台には400kgまで搭載可能だ。

クワズール・ナタール州の緑の丘はワークマックスにとつてまさに試練となるが、ワークマックスであればそれも乗り越えられると同社は自信をのぞかせている。1コンテナに16台ずつ入りで輸入されており、すでに2コンテナ分の32台を売り上げている。



ドイツで開催された国際農機展アグリテクニカでお目見えしたJCBワークマックス800D UTV。販売元のグリーンフィールズ・アグリカルチュラル社により最近、南アフリカ進出を果たした。